

従つて正福寺に狸の和尚が居たことも何とも言はぬ事である。どうも話が幾通りもあつて煩はしいが、別の話では、その茶釜は天正時代、長篠の城にあつた物で、城主が國替への節遣して行つたもので、従つて此家は先祖が、武士であつたと言ふ。

もう十年程前になるが、その茶釜を見せて貰ふ爲め、わざわざ訪ねた事がある。以前の屋敷跡の傍に、今は小さな構へを結んで居た。五十恰好の、何處か暗い感じのする内儀が一人居て、詳しい話をしてくれた。二十年前迄は、此處の爐に掛けて使つて居たが、もうありませんとの事だつた。尤もその以前から、蓋と蔓手は別物だつた。或時鑄掛師に持たせてやると、蓋と蔓を失くして來たのださうである。それ以來蔓手は只の針金で間に合せて居た。その後引續く不運に、茶釜迄も幾何かの代に、親類の者に持つて行かれてしまつたのださうである。今は其處に藏つてある筈だ、何なら其方へ行つて見てくれとの挨拶だつた。其折の話の模

様では、肌が赤味を帯んだ鐵で、離れて見ると陶器のやうに見えたさうである。一方に鐵瓶のやうな口があつて、口の附根から、鹿の角の恰好した三ツ又の脚が出て居たと言ふから、茶釜としては風變りな物だつた。

あの茶釜だけは家の寶だで、何としても手放すまいと思つたがと、そつと目を拭いたには、思はずつり込まれて悲しくなつた。未だ他に、系圖と立派な腰の物もあつたが、悉く失くしてしまつたと、散々情ない事を聽かされて歸つて來た。

後で聞いた話だつたが、その茶釜は、實は昔話以上に、持つて行つた親類の男の手から、諸方を渡り歩いたさうである。豊橋から名古屋東京と、實は思惑で持廻つたのだが、男の思ふやうには金にならなんだと言ふ。それで仕方なく家へ持歸つて藏つてあるのださうである。そんな事から、昔話の文福茶釜其儘に、再び元の家の爐口へ、還るやうな日が無いとも言へぬ。

十九 古茶釜の話

文福茶釜の話の次手に、狸とは直接縁を引いて居ないかも知れぬが、在家の爐口に吊してあつた茶釜の話がある。話の端が、幾分でも狸の問題に觸れて来ればめつけものである。

近在で使用して居た茶釜は、最も多く寶飯郡の金屋かなやで出来たものと謂ふ。棗形で底に疣が三つ出て居る。肩の處に蔓が附いて居た。別に丸形の中央が膨れて、腰鏝のある茶釜をば、文福茶釜と呼んだのである。文福茶釜を使つて居る家は滅多になかつた。爐に掛けるに工合が悪かつたからである。

前にも度々話した追分の村の中根某の家は、家としても古かつたが、爐に掛かつて居る茶釜がおそろしく古い物だつた。形は普通で心持ち丸形だつた。天正時代長篠城三茶釜の一ツで、大した物だなど、謂うた。近頃になつて、其家の老人

が時々思ひ出したやうに、其の茶釜を流れに持出して磨いて居るといふ話を聞いた。今に三百兩位で何處からか買手が出て来るだらうなどと、一人極めして居たさうであるが、此頃でも矢張爐に掛かつて居るといふ。

自分の家の近所にも一個古いと言ふ茶釜を持つて居る家があつた。爐に吊してある處を通りかゝつた棒手振が見て、これなら五兩迄買ふと保證したとかで、大切に居た。格別見た處變つても居なかつたが、底に疣のないのが普通の茶釜と異つて居た。

長篠村西組の赤尾某の家は、大して立派な暮しもして居なかつたが、長篠戦争時代から續いた舊家と言うた。此家の爐に掛かつて居た茶釜は、戦争當時用ひた陣茶釜であると言ふ。極く小形のもので、如何にも只の茶釜で無い事は肯かれた。然し永い間問題にもならずに来たが、家が不如意になつて、小さな處に住むやうになつてから、近くの醫王寺の和尚が目を附け出して、大變な執心で遂に主人を

口説落して、永代祠堂金の代に寺へ引取つて行つたと謂ふ。和尚はそれを、前からあつた長篠役の遺物の中に加へて、來客に茶を立てたりして珍重して居たが、明治三十幾年醫王寺の出火に遇つて、殆ど形ばかりに成つてしまつた。寺へ遣つたばかりにあんな事になつたと、元の持主の老人が、落して居るのを聞いた事がある。

長篠城の倉屋敷の跡に住んで居た林某の家の茶釜も、珍らしく古い物で、此家で家財整理をした折に、買取つた者が意外な金儲けをした噂があつた。林某の家も舊家で、長篠合戦の勇士の後裔であつた。

八名郡山吉田村新戸あらたの某の家の茶釜も、古い物だつたさうである。珍らしく大きな茶釜だつたが、形は變つては居なかつた。湯が沸いて來ると、釜の肌色が赤味を帯んで來て、何とも言へぬ光澤が出て來るのが不思議であると言つた。後に主人が床の間に持込んで花を活けてあると云ふ話を聞いた。

斯うして竝べて見ると、古い茶釜の話の家が、どれも舊家であるが、何れも家運が以前程でなくなつて居たのである。勿論不如意になつてこそ、自在鍵に掛けられた茶釜も問題になるのであるが、別に茶釜と家の福分とを、結びつけた何物かがあつて、こんな話も出來て來るのでないかと思ふ。茶釜の中に福の神が居ると言つて、自分なども幼少の頃から八釜しく言はれたものであつた。三州横山話に書いた村の長者の家は、主婦が誤つて茶釜に錘つづを當てたゝめに、家の福の神が遁出して、忽ち没落したと言つて居る。今一段と材料を集めて行つたら、福の神の正體が意外な姿を顯はして來さうにも思はれる。

二十 古い家と昔話

鳳來寺村峯の某の家は、おそろしく古い家で、何代前に建てた事か想像も出来ぬ程煤に埋もれて居たと謂ふ。どうした譯か此家には、昔から狸が棲んで居るといふ噂があつた。姿を見せるとは言はなんだが、夜など客が爐に向つて主人と話して居ても、時折バサリと變な音がして、急に燈火が暗くなる事がある。その時は自在鍵の上から、何やら箒のやうな物が下つて居る。それが狸の尻尾だとも謂うた。それで居て格別その狸が悪い事をするとも聞かなんだが、或時若主人が、近時の噂を氣にして、狸退治をする事にした。爐に青杉の葉を山と積んで、ドン／＼燻し立てると、追がの古狸も閉口したと見えて、壁から壁へサツと尾を打つけては、天井から天井を遁げ廻る音を聞いたが、遂に取押へる事は出来なんださうである。然し其事以來狸は屋敷を遁げ出して行つたらしく、それらしい事もな

かつたと言ふ。或は尙居るなごもいうたが、十數年前家を取毀してしまつたと言ふから、何れにしてももう何處かへ宿替へした事であらう。

北設樂郡本郷の、某といふ酒屋の土藏にも、狸が棲んで居ると謂うた。永い事酒を呑んで、腹のあたりが赤い色をして居る。それでその土藏を取毀した時には、澤山の同類と共に、次から次へ遁げて出たとも謂うた。

長篠の城跡の近く、寒峽川と三輪川の渡合にあつた長盛舎といふ運送問屋の荷倉にも、狸が棲んで居ると専らいうた。其荷倉は久しい前に取毀してしまつたが、おそろしく長い建物で、中へは入ると、一方の端は見かすむ程だつたと言ふ。如何にも狸が棲みさうだと言つた者もあつた。其處の狸が、時折近所へ出かけて、人を化すとも言うたが、時折倉の中で亂痴氣騒ぎをやつて、その太鼓や笛の音が川を越した乗本のりもとや久間迄手ひさまに取るやうに聞えたさうである。

此の荷倉の話でもさうであるが、古い大きな建物の形容に、狸が出さうだとは

一般にいうた事である。

これで狸の話も略材料が盡きるから、八疊敷の昔話をしてそろ／＼終りとする。自分等が聞いた昔話の中で、狸を扱つたものは、文福茶釜にカチ／＼山位なものであつたが、別にきんたま八疊敷と謂ふのがあつた。此話は二通りあつたやうで、子供の頃度々聴かされたものであるが、話が下品とでも思つたせい、詳しく記憶せなんだのは遺憾である。

先づ一人の博奕打があつて、ごうした譯だつたか狸の化けた賽ころを手に入れる。その賽ころは男の言ふ通りに目が出るので大分工合がよい。それでいろ／＼な物に化けさせたが、或時隣家に婚禮があつて、何か祝ひ物をせねばならぬが生憎何も無い。そこで賽の目に鯛と出ると言ふと、見事な赤鯛になる。男がそれを持つて隣家へ呼ばれて行く。鯛はいろ／＼譽言葉を受けて、懸て臺所へ下げられ料理の段になつて、俎に載せられると、急に跳ね出して、遂々床下へ跳込んでし

まふ。そんな譯で男が無理な注文ばかりするので、狸が愛想を盡かす、いよ／＼別れる段になつて、八疊敷を見せる事になる。そして立派な青畳を敷き詰めた座敷になるが、男が見惚れて煙草の喫殻を落すので、ジッと音がして座敷は忽ち消えてしまつて、男は一人廣い野原の真中に坐つて居たと言ふやうな筋だつた。

今一ツは、一人の小僧が道で皺くちやになつた、袋のやうな物を拾ふ、觸ると温かで、柔かでモチヤ／＼したものである。その袋が、前の話と同じやうに、小僧の言ふ儘いろ／＼の物になつて見せる。最後に小僧が八疊敷と言ふと、見事な座敷になつたが、中に一ヶ所變な括り目のやうな處がある。小僧がそれを氣にして、針の尖でチヨイと突くと、ジッと音がして元の毛だらけの變な物になつてしまつて、もう役に立たなんだと謂ふのである。

二十一 狸の最後

村の狸の話もはや末であつた。屋敷近くの森や窪に居た狸は、家の者と呼くらして負けて、腹を上にして、とくに軒下へ来て死んで居た。その他の古狸の多くも、大方は狩人に鐵砲で打殺されたり、カンシヤク玉を噛まされて、口中を打割つて死んでしまつた。煮て喰つたが肉が恐ろしくこはかつた位で、簡単に結末が着いて居た。嘗て多くの物語を遺したものにしては、あつ氣ない最後であつた。それからもう一ツ、呼び負けたり鐵砲で打たれたで無く、稍狸らしい最後を遂げたものがある。鐵道が通じたと同時に、汽車に化けて、反つて汽車に轢殺されたのである。何處にもある話で、餘り煩はしいが、一通り言うて見る。

明治三十幾年であつた。豊川鐵道が初めて長篠へ通じた時である。川路の正樂寺森の狸が、線路工事の爲めに穴を荒された仕返しに、或晩汽鐘車に化けて走つ

て来て、此方から行く汽車を驚かした。初の方は汽鐘手もうつかりして、慌てゝ汽車を止めたが、次の晩には、向ふも同じやうに警笛を鳴したが構はず走らせる。その汽鐘車はフツと消えて、何やらコトリと轢いたと思つたが、只それだけでもう何事も無かつた。翌る朝見ると線路に古狸が一疋轢かれて死んで居た。それを線路工夫が拾つて煮て喰つたげな、あの川路の停車場から少し長篠寄りの、山をえらく掘割つた處だと、最もらしい話だつた。それから正樂寺の森へは、ちつとも狸が出ぬと言ふ。

妙な事に此話の生れる前に、同じ類の話を自分なども既に聽いて知つて居た。話は川路よりは遠かつたが、初めて東海道へ汽車が通じた時だと言ふ。寶飯郡の五油と蒲郡の間のトンネルで、古狸が汽車に化けて轢かれたと専ら言うた。トンネルが出来て穴を毀された恨みと言ふのも前の話と違はなかつた。汽車が第一に運んで来た土産だつた事はよく判る。如何な狸の奴でも、汽車には叶ふまいなど

、感心したものであるが、一方から考へると、狸にとつての汽車は、トンネル工事で穴を毀される以上に、憎い／＼敵であつたかも知れぬ、さうして結果は狸が負けて亡びて行つたのである。

トンネルの事から、もう一ツ連想する話があつた。明治の初年、長篠の湯谷から、川傳まきはらひに牧原へ越す峠を、獨力で開鑿してトンネルにした者がある。その後其處の山の狸が、穴を荒された腹癒せに、每晚出て悪戯をする、日が暮ると、マシボ(トンネル)の中程に傘をさして立つた居て嚇すと言うた。穴を荒した主で無しに、通行人に仇をしたのは聞えぬ譯合だつたが、此方は汽車で無かつたゞけ、狸の方は太平樂でやつて居て、結局通行人が永い事迷惑したのである。然し其處の狸は、格別殺された話も聞かなんだが、近年人道の下を更に汽車のトンネルが通じたから、或は又變な眞似をして轢殺されたか知れぬ。然し未だ聞いて居なかつた。或はとくに何處かへ安住の地を求めて去つたのかも知れぬ、もう大した噂

も聞かなかつた。

半殺しの狸ではないが、未だ言残した事が一ツある。横山から東へ、遠江引佐郡別所べつしよの、本龍寺と云ふ古寺では、夜になると狸が雪隠に來て悪さをすると謂ふ。或時寺に居た娘が用足に行つて、青くなつて逃げて來た。寺婆が檢分に行くと白髯のえらい爺が、中に踞んで居たと言ふ。明治初年の事で其婆さんから直接聞いた話が傳つて居た。又狸が雪隠の戸を鳴す話は外にも聞いたものである。誰も居ないのに、キーと音がするのは、狸だなどと言うた。此話と關係があるかどうか知らぬが、山小屋などでも、狸が雪隠について困ると言ふ事を度々聞いた。

跋

えて冬に有がちな天候であつた。夏分にあるアブラ日さ云ふのさ
も異つて、ドンヨリ落付いて、晴れさも曇りさも、境目の判らぬやうな空
合である。かうした日に限つて、物の隈がはつきりと浮いて、遠くの山
の木の葉も、一枚一枚算へられる。大小様々の恰好した山のツルネに
圍まれた中は、丸で水の底のやうな静かさを保つて、次の瞬間に、何事か
待受けてゞも居さうな一刻である。

かうした折であつた。體中の血も暫く流れを止めたやうに、懶くて、
肉體が表面から段々ぼかされて溶けて、まわりの空氣から土の中へ泌
み込んででもゆくやうである。何處か斯う、地の果からでも湧いて來

るらしい、幽かな喧燥が、次々に漂つて来た、それが一度、肉體の何處かに觸れたと思ふと、忽ち異常な緊張が蘇つて来る。それが何であるか説明は出来ぬが、アツ何處かで猪を追つて居る、その口の端へはもう出て来たのである。凝り耳を澄すと、如何にも何處かでホイ／＼と掛聲がする、キヤン／＼と細い犬の鳴聲も聽へる。成程猪追ひらしい、聽てそれ等の響が、次第に近づいてはつきりして来る。風が峯を渡つて来るやうだ。

狩人が猪を追つて、山を越えて近づきつゝあるのだ。鐵砲の音がした、矢聲が続けさまに響く、猪追ひは今正に酣であつた。畑に働いて居る者も、路を歩いて居た者も、もう昵として居られぬやうな氣がした。何處だらうと、仕事の手を休めただけでは濟まされない、思はず宛もなく走り出す者もあつた。人々の胸には、猪の走つてゆく姿が、明らかに

眼に映つて居たのである。

村の人々にまつては、猪追ひそのものが、單なる興味ばかりでなかつた。別に何物が劇しく心をひかれるものが、體の何れかに、未だひそんで居たのである。

かうした村の人々が、獸の話に興味を抱き、好んでそれを物語つたり聽かうとしたのも、實は由來が遠かつたのである。狩の話が面白くて忙しい仕事も忘れて、畑の隅に踞んだまゝ、半日潰してしまつたなどの事も、ちつとも無理ではなかつたのである。

○

猪、鹿、狸と、山の獸の名が麗々並んで居ながら、獸そのものゝ話が、至つて妙かつた事は、語る者さしても誠に遺憾である。獸の話の妙い理

由は、實は別にあつたのであるが、話の内容としては、此話の全部が、本來「三州横山話」と一緒に語るべき性質であつた。従つて話の範圍も、横山の村を中心とした、僅か數里に亘る地方より以外には、殆ど及んで居なかつた。悉く其處で生れて、成長したものである。それで「横山話」とは絶えず觸合つて居ながら、どちらか一方に纏めて、筋目立てる事の出来なんだのは、誠に齒痒い限りである。

自分にまつては、横山は祖先以來の地で、生れて十幾年間は、殆ど一歩も外の地を踏まずに、育まれて來た因縁の土地である。境遇も感情も、只の村人に成り切つて居たであらう、もごく普通の百姓家に生れて、村一般の仕來りの中で育つたのだから、これは當り前の事である。話にしても、村の人が興味を持つて語る事を、そのまま、素直に受け入れたままである。餘り村の人そのまゝである事に、今でも驚いて居る位

である。然し假にこの物語の内容に、村の人らしくない、心持に隔りがあつたとすれば、それはこの話をする現在である。東京に十幾年暮して居た爲である。その爲なまじい都會人らしい常識が混つて來たしたら、話そのものゝ爲には、本意ない譯合である。然しその事はどうとも致方ない、どうやら横山に咲いて、小さいながらも、實を結んだのが、東京だつたとするより證ない事である。

○

獸の話が尠なかつた理由は、第一には蒐集が未だ充分で無かつた事にも據るが、それよりも、本來を言ふに、横山附近の土地が、渠等獸にまつて、既に足跡の餘り濃い地方で無かつたかと思へられる。地勢から言つても、附近の状況から見ても、さうではないかと思ふ。假に足跡が濃

厚だつたとしても、もう久しい以前のこゝで、近世では、渠等の爲に一箇所取遣された場所に過なかつた、そんな風に考へられるのである。斯う言ふと、話の内容も、大分矛盾する點もあるが、渠等が土地から姿を匿したのには、村の人々が信じて居た如く、三十年四十年程度のもので無く、その間にもつと隔りがあるのでないか、實は話にしても、事實にしても、正に盡きんとする爐の槽火が、炭に變る時の、最後の輝きを見せられて居たので、例へば話の一ツ一ツを克明に辿つて見ても、どうもそれ以前に、大分影が淡くなつて居たらしい形蹟が認められる。

勿論程度の問題であるが、例へば明治三十年頃の、段戸山中に現はれた夥しい鹿の群なども、實は久しい言傳への幻影であつて、事實は昔である時代に、峯から峯を越えて、霧の如く消え去つたもののやうに考へられる。假に此判断が誤つて居たとしても、四周の状況から見ても、何處

迄も話の儘を事實として言張れない氣がする。

今一つの理由は横山の地勢であつた。山地とは言ひ條、一方外界との交渉がはげしくて、靜かに話を繰返して居るには、餘りに忙しすぎた。早くから汽車の笛を聞くやうになつた事が、黙以上に、早く話を亡びさせてしまつた原因の一つであつた。

○

横山は東三河を縦貫した豊川の上流で、遠江國境には三四里の路程にある一寒村である。村から言ふと、西南方即ち豊川の下流地方も、北東山地との境界に當つて居た。東海道筋からは入つて、豊川の流に沿つた七里の路は、稍平坦な丘陵を縫うて走つて居たが、此處から急に山が高くなつて、路は山又山の間を、信濃に向つて辿つて居たのである。

其間は所謂北三河の山地で、現今の北設楽郡で、昔の振草の里であつた。段戸山を初め、月の御殿山、三ツ瀬の明神山など、代表的深山で、其處は未だ文明の光も透さぬ、天狗山男の世界の如く永い事信じられて來たのである。山稼ぎを職とする杣木樵の類も多く入込んで居た、その連中が、珍らしい物語を運んで來て流布したのである。自分などもそれを好んで聽いて信じたものであつた。猪鹿を初め多くの獸の本據も又其處にあつて、村が山續きに續いて居る如く、獸も又其處と連絡して居ると信じて居た。恰度表口と背戸のやうに、一方東海道筋の明るい交渉を受けながら、背戸口は依然として、昔の儘の山の影響が深かつたと云ふのが、横山の實際だつたのである。

然しながら村の者が、獸の本據の如く考へて居た山の實際も、今日では話その物と大分の隔りが出來た。今年の正月、北から南へ振草の里

を越して見るに、自分が歩いた範圍では、猪鹿の類もさくに姿を消して了つて、もう二十年も經つて居た。猪などは反つて、吾が在所の方が本據のやうに思はれた。實は以前から信じて居た山續きの交渉は、いつか断たれて居たのである。して見れば横山の猪なども全く孤立した山陰に取遣された集團の一つに過ぎなかつた。それも、僅かな數であつた。一個の猪の影を、地を代へ人を代へて、幾つにも見た程度のものである。

こゝに集まつた話が恰度それであつた。山陰に取遣されたもので、さくに消えて居た筈のものである。それだけに、内容の無い、影の淡い話ばかりだつた。其上にも話の一つ一つが、何年前の事、何處の出來事と、その折々に孤々の聲を擧げたものばかりでなく、話が生れると同時に、もう久しい傳承の衣を着けて居たらしいのである。

○
 黙ばかりでない、猪鹿狸に絡んだ人間のこまや家の物語もさうであつた。一々正確な事實の記録さばかり極められなかつた。例へば風來寺行者越の一ツ家である。そんなにも古くも無い事だが、幾通りにも語られて居た、劔術使ひの又藏老人が、死んだのは明治になつてらしいが、相貌の説明にも二通りあつた。一眼であつたと言ふ一方に、いやさうで無いと言張る者があつた。いやたしかに一ツだつた、現に一ツは弓術の遺恨から、大野町の某に、欺討にされて潰れたと言ふのである。然し斯うした問題は、年次に據つて、どうとも解釋せられたから文句は無いが、四尺幾寸の小男であつた事は確らしいのに、立派な體格だつたなど、途方も無い事を語る者のあつた事である。斯うなるを、話も何

を的に聽いて宜いか判らなかつた。話手の精神状態から研究して掛る必要も生じて来る。然しそれは到底不可能な事である。せめて話手の姓名年齢から、出来れば性質も少しは擧げる必要がある。性質は未だしも、姓名と年齢は是非共言はればならぬ。それが多くの場合不十分であつた。實は大抵判つて居るのであるが、いろ／＼の筋合から、わざと省いた事である。それには話の煩はしさを考へた結果もあるが、もつと大きな理由は、その人々への遠慮である。讀者には誠に相濟まぬ次第であるが、かうした類の話の種になつた事を、何か馬鹿にでもされた如く、思込んで居る人が、未だあるらしいのである。勿論その人々さて、それが眞の心持ではないと思ふが、さうした心遣ひから、話に迄手加減した點も又あつたであらう。

この話が世に出るについて、第一に思出さねばならぬ事がある。東京の山の手の、檜の木立に圍まれた家であつた、其處は外濠に近い高臺の屋敷町で、東京の町中で居ながら電車の響も大分遠かつた。西向に庭を控へた部屋の、片隅に置かれた椅子に腰を下すと、硝子戸越し、うつすりさ青苔を被つた庭土が見えた。恰度その中央あたりに、櫻桃が不調和に枝を伸して居て、それと向ひ合つて、古いドウタンの株があつた。庭の行詰りは、高く伸たカナメの株が竝んで居た。今思ふと、もう幾年かになつた。その部屋を訪れる度、次から次へ、きまりもなく語つた話がいづつさなしに溜つてしまつた。たゞひ塵芥にしても、これだけになつて見れば、此儘更に谷や川へ持出して捨て、了ふのは惜しい、何さか

成らぬかと言はれるまゝ、思ひ切つて似よりの物だけづゝ、又小分けに拾ひ上げて見る事になつた、それが此處に集めたものだったのである。考へると、可成り永い間だつた。或時は櫻桃の花がもう散りかけて居た、それが實を結んで、幾度か花を持つたのだ。カナメの葉が、一枚一枚日に輝いて、ハッキリ讀まれた事もあつた。寒いみぞれの來さうな日に、虎鶉が一羽何處からか迷ひ込んで、頻りに苔をついばんで居た、暑い夏の日盛りを、白い猫が、靜かに飛石の間を歩いて行つた事もあつた。今思ひ出して恐縮する程、よくも憶面なく、横山の村の爐縁を持出したやうな話を續けたものだ、さう言へば、あの椅子の前に在つた四角な火鉢臺が、その爐縁の役目をしたのである。して見ると、語手の自分は横座に向つて座つた木尻の客だつたのである。假に火鉢臺に心があれば、そんな呑氣話を、此處でされてたまるかと、さう言つたかも知れぬ、そ

の間に、部屋の長押に掛つて居た、六かしい維新の元勳の書が、いつか横山の山を描いた、額に變つて居たのも偶然だつた。

木尻の客は、話が濟んで腰を上げて、暇乞して玄關を出るさホツさした。何かしら口に言現はせない、體中汗ばんだやうな興奮があつた、外には明るい都會らしい日が照つて居た。足を電車通りの方へ運ぶ間名残の夢でも惜しむやうに、暫くは村を思ひつゞけた。さうして、嘗て自分に語つてくれた村の人々の顔が、何の屈托も忘れて居さうな目付が、しきりに胸に蘇るのを感じた。

その人々の中には、語り了つた時に、眼を眞赤に泣腫して居た人もあつた。遇つたら話さうさ、忙しい仕事の間にも、忘れまいさ心掛けて居てくれた人もある。ほんの子供の頃聞いた話を、何十年か胸に藏つて置いて、問はれた爲に語つたさいふ女もあつた。その人々の顔付だけ思

ひ出して見ても、語つた時は自分さ同じ心持だつた事が判つた。よし明かに意識はしなくとも、慥くも話して居た間だけでも、話さぬより幸福だつたに異ひなかつた。

その人々の中には、もう死んでしまつた人もある。一遍は語つても、仕事や境遇に追はれて、再び思ひ出さぬ人もあるであらう。このまゝ放つて置いたら、何れは何處さも無く消えてゆくに決つて居る。して見ればこの小篇は、それ等の人々の爲にも、或は又山陰で淋しく亡びて行つた猪や鹿や狸の爲にも、一基の供養塔であつた。形はよし拙なくさも、建てたその者は因縁が薄くさも、永く山口の草に埋れつゝも残るであらう。斯う考へれば、あの横座の主に迷惑を掛たのも、火鉢臺に退荒さした事も、この供養塔の建つ因縁だつた。どうしても吾一人の問題では無かつた。さう思へば、後から後から、多勢の人や獸が動いて居

るやうだ、さうだその人々に代つても、先づ第一に溜息を吐く程の大きな感謝を、あの横座の主に捧げればならぬ。さうして今一人、此供養塔の爲に、決して忘れてはならぬ恩人があつた事である。

大正十五年十月

早川孝太郎

大正十五年十一月十一日印刷 猪・鹿・狸
大正十五年十一月十五日發行 定價壹圓五拾錢

著者 早川孝太郎

發行者 岡村千秋
東京市小石川區茗荷谷町五十二番地

印刷者 津村福章
東京市神田區西小川町二丁目五番地

株式會社一話印刷所印刷

發行所 郷土研究社
東京市小石川區茗荷谷町五十二番地

振替口座東京二二九一七番

556
157

第七研究社
第一一七號書

終